

Not-God

『アルコホーリクス・アノニマスの歴史』

Ernest Kurtz (アーネスト・カーツ)

第2部 解釈

第八章 宗教思想史の文脈で①

「宗教的というより靈的」 - AAの宗教的本質」

Presented by

GAコーナーストーン

1

第八章 宗教思想史の文脈で

アウトライン

スピリチュアル

1. 「宗教的というより靈的」 - AAの宗教的本質
2. アメリカ宗教思想の二つの流れ
3. 降伏・回心・救済 - AAプログラムの宗教的構造
4. 言葉と証し、反専門主義、反知性主義
5. アノニミティの意味と現代的意義

2

第八章 宗教思想史の文脈で

今回のテーマ

スピリチュアル

● 「宗教的というより靈的」

プログラムやミーティングで何か言おうとする人に対して、AAメンバーはこの二つの区分をすることをきっちり求めことが多い

Not-God p.281

フェローシップの内外で生じたさまざまな影響を反映して、AAは「宗教的なもの」を注意深く避けて「靈的なもの」を受け入れている

Not-God p.282

3

第八章 宗教思想史の文脈で

今回の問い合わせ

スピリチュアル

- なぜAAは「宗教的」を避け「靈的」を選ぶのか
- AAと近代の関係をどう理解すべきか
- AAは宗教なのか、それとも違うのか

4

AA = 米国的・近代的

AAを靈的（スピリチュアル）なものとイメージしてもらいたいという実際上の関心は、AAがまさしく近代ならではのものであり、とりわけ一つの宗教現象としてとらえられることを明瞭に示している

- 近代的でありながら宗教的
 - 宗教を避けながら宗教現象
- ⇒ この矛盾がAAの本質

近代の矛盾

個人の行動の源泉としては「信仰」を断固として拒否さえした近代人が、少なくとも他者の自律性を侵害しないかぎりにおいて、「気持ち（フィーリング）」という考え方を容易に受け入れてしまったことだ

- 信仰 (Faith) = 拒否する
 - 感情 (Feeling) = 受け入れる
- ⇒ しかし、両者は本質的に似ている

近代への適応

AAの「靈的プログラム」にある「私たちより大きな力」は、この近代的なカテゴリーによく当てはまる

- ・ 信仰ではなく感情に即して自分なりの神を理解
- ・ 妄信ではなくソブラエティという事実を受け入れる
⇒ どれも目には見えないもの

7

近代的な価値判断

拒否	容認
信仰	感情
教義・権威	個人的体験
妄信	事実
他律	自律

⇒ AAはこの境界線上に位置する

8

オックスフォードグループから学んだこと

1. よい点

- 教会という組織化された宗教から独立していること

2. 問題点

- それら教会をあまりにも攻撃的に批判すること

二つの課題

1. 無宗教という立場を保ちながらも魅力的なものであること

- 宗教アレルギーを持つ人も引きつける
- しかし深い変化をもたらす

2. 宗教をもっている個人を攻撃しないこと

- 信仰を持つ人も排除しない
- 多様な信念の共存

AAの解決策 「宗教的というより靈的」

自分自身を「宗教的というより靈的（スピリチュアル）」と表現することで、この重複した懸念に決着をつけようとし、宗教の概念のなかに隠れている、人びとを分裂させ対立させるような「教会っぽい（churchy）」という言葉と正面から向き合わないようにした

- 「**宗教的**」は分裂的
- 「**靈的**」は包摂的

11

歴史的文脈 - 1935年以前

1935年よりはるかに前から、善人になりなさいという宗教的な忠告と、もっと生き方に責任をもつという道徳的な誓いとを、多くのアルコール依存症者は十二分に味わってきた

- 米国の禁酒運動
 - 宗教者の支援
- ⇒ 効果は限定的
なぜ失敗したのか？

12

宗教的アプローチに欠けていたもの

AAが初期に経験したできごとや、「ビッグブック」の初版に掲載された物語は、このような「宗教」を試してみた多くのアルコール依存症者が、そこに欠けているものに気づいたことがはっきりとわかる

- 意欲 (willingness)
- 正直さ (honesty)
- 開かれた心 (open-mindedness)

⇒ これらが回復の本質であり欠かせないもの

13

AAの宗教的性格

長年のあいだ、注意深い研究者（さまざまな社会学者や心理学者や人類学者）は、明確にそして変わることなく、AAのプログラムとフェローシップの鍵になるものはある意味「宗教」的なものだと直感していた

スピリチュアル

- AA自身は、**宗教的ではなく靈的な**プログラムと主張

⇒ この矛盾をどう理解すべきか？

14

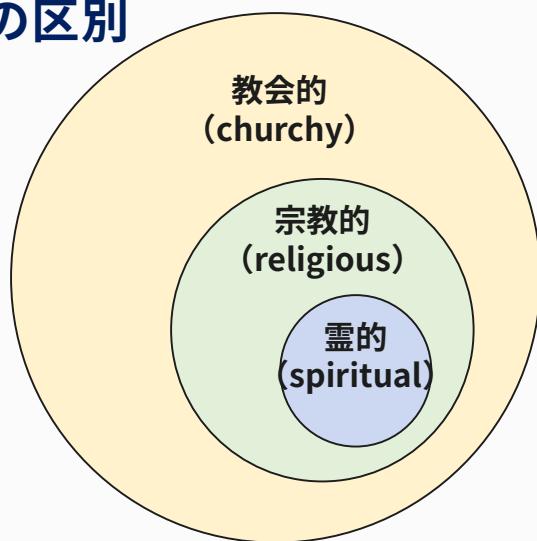
問題の自覚

AAのメンバーがこの問題を感じていたことは、「靈的（スピリチュアル）」と「宗教的」を区別しようと試みていたことからわかる

- AAは本質的に宗教的
- 宗教的であることを認めると問題が生じる
⇒ だから区別が必要

15

三つの用語の区別



うえのしま「草を結びて」『宗教的経験の諸相』のスタディ 16
「第5回 「宗教」および「神」とはなにか」図版を参考に作図

教会への失望

「私たちは靈的（スピリチュアル）な幼稚園を運営している」とビル・ウィルソンはよく言っていたが、彼はけっして躊躇することなく、その前提で「信仰とは……私の場合は、人間が生きている世界が最終的に正義と愛が通る世界であるかどうかという問い合わせを意味していた」と語っていた

- 教会はふつうの人よりもつような問い合わせには答えない
- 神学的なアプローチにはソブラエティにとって障害
⇒ 「^{スピリチュアル}靈的」なものは効果があった

意欲・正直さ・開かれた心の重要性

フェローシップのなかでの非宗教的なものと、AAの外での宗教専門家との両方への敏感な思いがあったので、AAは、宗教の表現の一つだけに慣れ親しむことに抵抗があり、「開かれた心をもっていること」を切に願っていた

- 特定の宗教を避ける
- 多様な神の理解を認める
⇒ プログラムの^{スピリチュアル}靈的な側面で困難を味わわずにすむ

職業的宗教家への懸念

ワシントニアン運動の悲しい経験が念頭

- ワシントニアン運動の崩壊
 - 当初は成功したが宗教家の介入などによって消滅
 - AAがこの失敗から学んだこと
 - 職業的宗教家との距離
 - 独立性の維持

19

アルコール依存症の宗教的因素

私が思うに、多くの人びと以上に、アルコール依存症者は自分が何者であるかを知りたいと思っており、人生とは何であるかを知りたいと思い、自分たちが神につくられたもので運命がすでに決まっているか、宇宙の正義と愛のシステムのなかに生きているのかどうかを知りたいと思っている

- アルコール依存症者は本質的に**宗教的**なものを求める
- しかし、既存の**宗教**では満たされない

20

アルコール依存症の宗教的因素

アルコール依存症者たちが、アルコールに苦しみながらも神への道を見いだそうとして、かすかに見たり感じたりする、それ以上のものをAAに見出す、というのはまったく正しい。AAはこの点でももちろん有利な立場にある

- スピリットはスピリツ〔酒〕をしのぐ
(spiritus contra spiritum) ※1
- アルコール(spirits)への渴望
- 靈的(spiritual)な渴望の歪んだ形
- 真の靈性による解決

※1 なかやま ひいらぎ「心の家路」ピッグブックのスタディ 21
付録C 「ビル・Wとカール・ユング医師との往復書簡」

なぜ「宗教的」と言えないか

しかもしも私たちが公の場で、アルコール依存症者の飲酒願望には宗教的な動機が大きく寄与しているなどと言ったら、たいていの聖職者は真っ赤になって怒り、たいていの精神科医はばかげた話だというだろう

- 聖職者の反発
- 精神科医の否定

⇒ AAは「宗教的というより靈的」でなければならない

AAの逆説的成功

AAは、近代において威儀を失った「宗教的」という語を避け、「靈的」という語を容認できるようにした。靈的なものを近代において受け入れられるようにすることで、とても大きなことを成し遂げたといえる

- 宗教の本質を保持しながら非宗教的
 - 近代的でありながら反近代的
- ⇒ 実際に回復をもたらし、広く受け入れられた

まとめ

1. なぜAAは「宗教的」を避け「靈的」を選ぶのか
 - 分裂的な「教会っぽさ」を回避し、包摂的な共同体を実現
2. AAと近代の関係をどう理解すべきか
 - 近代の言語を使用するが、近代の前提を批判
3. AAは宗教なのか、それとも違うのか
 - 本質的には宗教現象だが、「靈的」という新しい形で表現

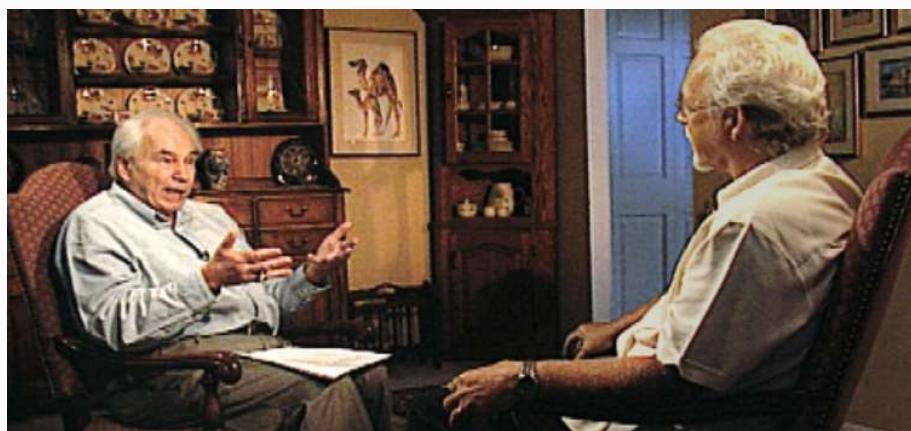
次回予告

テーマ「アメリカ宗教思想の二つの流れ」

1. 宗教的根本思想
2. 二つの宗教思想
3. AAにおける敬虔主義
4. AAにおける人間中心主義
5. AAにおける統合

25

ご静聴、ありがとうございました。



Ernie and Bill (2008)

26